

理想の動物園設計

篠原 碧里 白木 唯祐子

要 旨

近年、世界では動物の生態保護の観点から様々な保護活動が行われている。その観点から、動物園もこれまでとは異なる新しい取り組みを余儀なくされている。私たちにとって動物園は、多様な動物と触れ合うことのできる最も身近な場である。私達は動物園に焦点をおき、動物と人間双方にとってプラスになる「理想の動物園」を設計する。

An ideal zoo design

Midori Shinohara and Yuyuko Shiraki

Supervisor: Takashi Sekiya

Abstract

Recent years, several conservation activities have been done from the perspective of animal ecological protection in the world. You could include a zoo in it. Zoos are the place where we can touch the most diverse animals around us. We focus on the zoo, and design an ideal zoo that benefits both animals and humans.

1 序論

(1)研究のきっかけ

ある時、動物園の役割について知る機会があった。動物園の役割には、レクリエーションの他に、野生生物保護もその役割に含まれるという。しかし、近年多くの動物園が収益不足によりそこまで手が回っていないという。そこで、その解決策について考えることにした。

(2)仮説

動物園で動物を飼育しなければ、飼育費に回していた予算分を、動物保護活動の資金に充てられるのではないかと。動物を飼育する代わりに、動物園を動物に関する情報を発信・提供する場にすればよいと考える。

2 研究手段

(1)調査方法

① アンケート

- ・Google form によるアンケート
- ・紙面によるアンケート

② 視察・研究

③ インタビュー

④ 書籍調査

⑤ インターネット

(2)調査協力

日立市立かみね動物園

茨城県立土浦第一高校 640 部配布

社会福祉法人 聖隷会 玉造第三保育園 98 部配布

行方市立玉造小学校 550 部配布

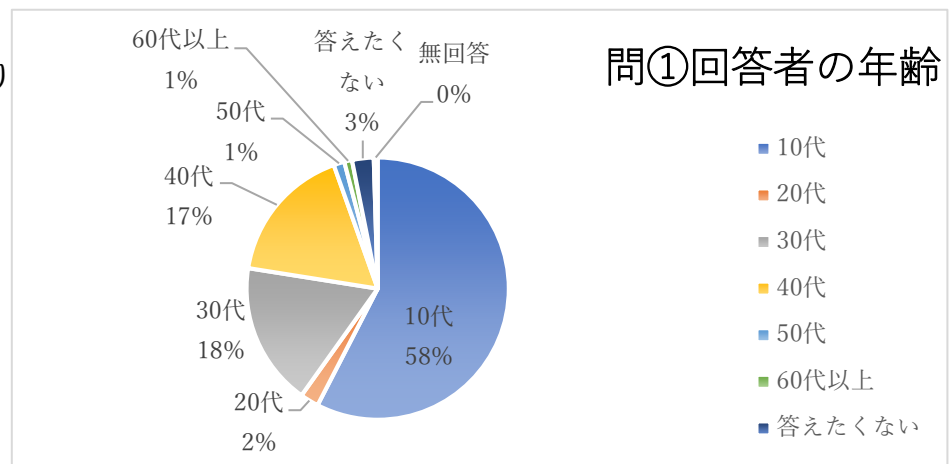
行方市立玉造中学校 327 部配布 (回収 1049 部)

3結果・考察

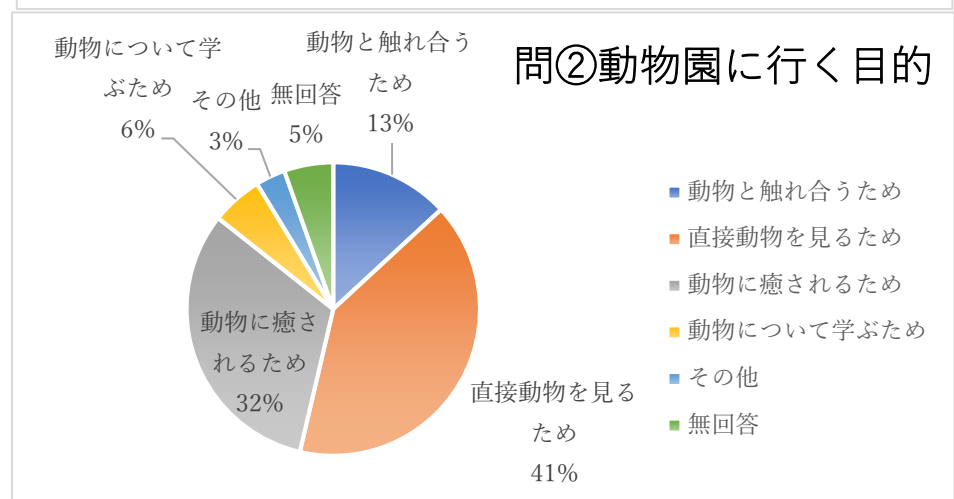
(1)調査結果

①アンケートより

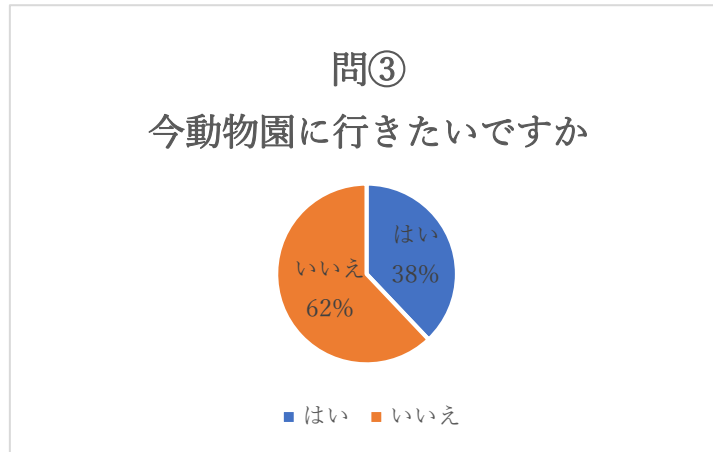
図①



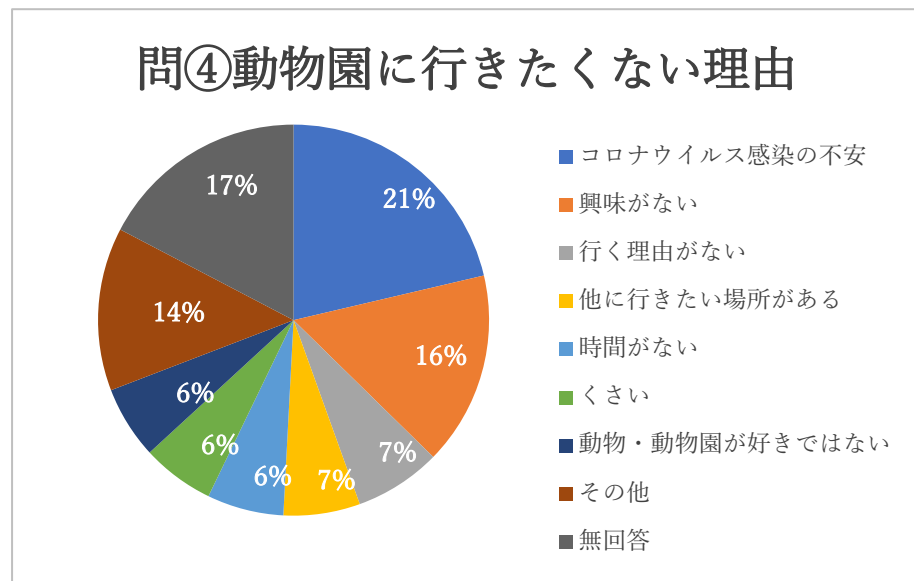
図②



図③



図④



問②の結果より、動物園に行く目的としては「直接動物を見るため」が4割を超えて1番多い。また、2番目に多いのは「動物に癒されるため」の32%である。(図②)

問④より、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の収束が見通せない現在は、人混みに行くことで新型コロナウイルスに感染する事への不安が、動物園に行きたくない理由において最も高い割合を占めている。新型コロナウイルスを含めた感染症予防対策については、これからも一定の配慮が必要になるだろう。

しかし、それ以外の理由については、動物園の来園者を増やすための今後の課題だと言えるだろう。(図④)

②書籍・インターネットより

動物園の主な役割は、レクリエーション(自然の不思議さに感動できる)、環境教育、自然保護(希少動物の保全)、調査・研究、自然史博物館、の6つである。野生動物保護に対する動物園の潜在的な役割は少なくとも60年前から認識されていた。現在では、絶滅危惧種の保護などの活動を支援する基金の増加などによる、現場での種の保護の重要性が再確認されている。しかしながら、1992年の国連生物多様性条約では動物園の役割について次のように記載されている。

「個々の国家が絶滅危惧種の飼育下での繁殖のために新たに特別な施設を用意しそうにもないので、この課題は既存の動物園に任せられるであろう。」と動物園の役割について記載されている。しかし世界の動物園全体では 14% 程度しかその役割を果たしていないのである。(資料⑧・資料⑨・資料⑩)

また、都市住民が増えた現代社会では、野生動物の危険性など、動物が本来いかなる存在なのかを知る動物教育が十分ではない。

(2) 考察

問②の結果より、動物園の役割として「直接動物を見ることができる」ということは大きな意味を持っていると考えられる。つまり、リアルな動物を直接見たり触れたりできることは「動物園」が「動物園」であるために欠かせない要素である。

問④からわかるように、人々が動物園に魅力を感じていないことも動物園にあまり足を運ぼうと思わない原因なのではないか。動物園に興味を持ってもらうためには、「知ってもらうこと」が最も重要になると考える。そのために、YouTube や Instagram、Twitter、TikTok などの SNS を利用し、動物たちの写真や動画、動物園の日常などをたくさんの方々に発信することでより多くの人々に興味を持ってもらえるようになるのではないだろうか。特に家庭では飼うことができない動物や動物を飼う際の注意点など、一般の方々とは少し異なった内容を発信していけるとさらに良いと思う。

したがって、動物園の収益を悪化させている原因の一つである、大型動物の飼育をやめれば、動物の研究費を捻出できる可能性を広げることができた。しかし、動物園が既存の博物館とは異なる「生きた動物園」としての役割を担うためには、動物の飼育を一切行わないということはできず、やはり動物園との触れ合いの場は必要不可欠である。よって私たちが理想の動物園を設計するに当たっては、情報の発信や知識の収集を行う headquarters(本部)にも結果的に動物と触れ合う機能が必要になると結論づけた。

4 結論・展望

(1) 結論「理想の動物園」とは

以上をふまえ、私たちは新しい動物園の形を提案する。この動物園は、動物に関する情報発信を重視する「headquarters(本部)」と、動物との触れ合いを重視する「branch(支部)」との2つに分け、国内全ての動物園をネットワークでつなげた大きな一つの動物園としてまとめる。(図⑦)

まず大都市部に、headquarters(本部)を設置する。headquarters(本部)は、4つのブースをもち、訪れた人々は一つずつそのブースを回っていくことで、日本、世界の環境と動物に関するデータ、野生動物保護の現状について知っていくことができる。(図⑧)ゾウやライオンなど飼育費のかかる大型動物の飼育をやめ、館内での動物との触れ合いを、小動物等に限ることで、飼育費を大幅に削減する。浮いた予算は、従来不足しがちであった動物の研究費や保護活動費等

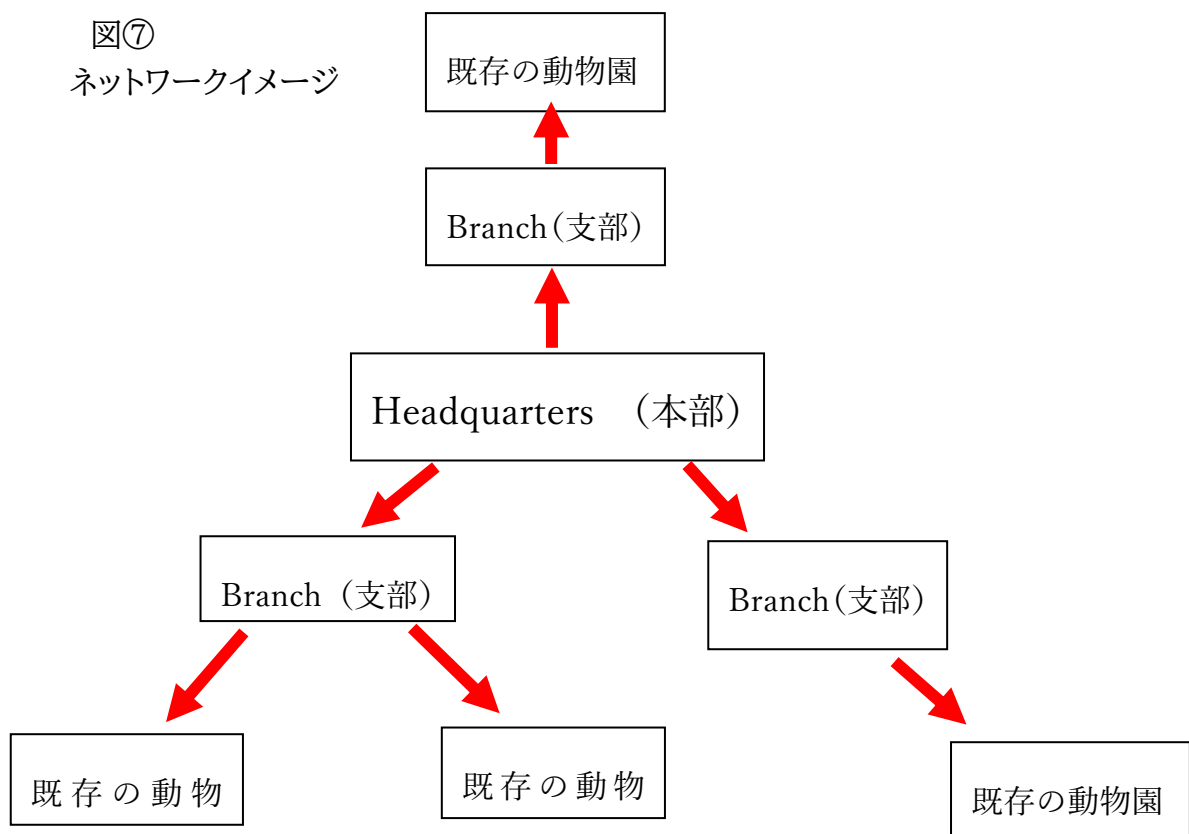
に充当し、headquarters(本部)は情報の発信および研究活動に専念する。

一方で地方の中核都市に branch(支部)を設ける。branch(支部)は、従来のような私たちがよく知る大型動物などを飼育する動物園ではない。地域の既存の動物園とつながり、その運営の協力をしたり、研究情報をやりとりしたりするネットワークのハブとしての役割を果たす。この二つで、一般の人たちが、動物についての知識や情報を知る機会をできるだけ多く持てるようにする。

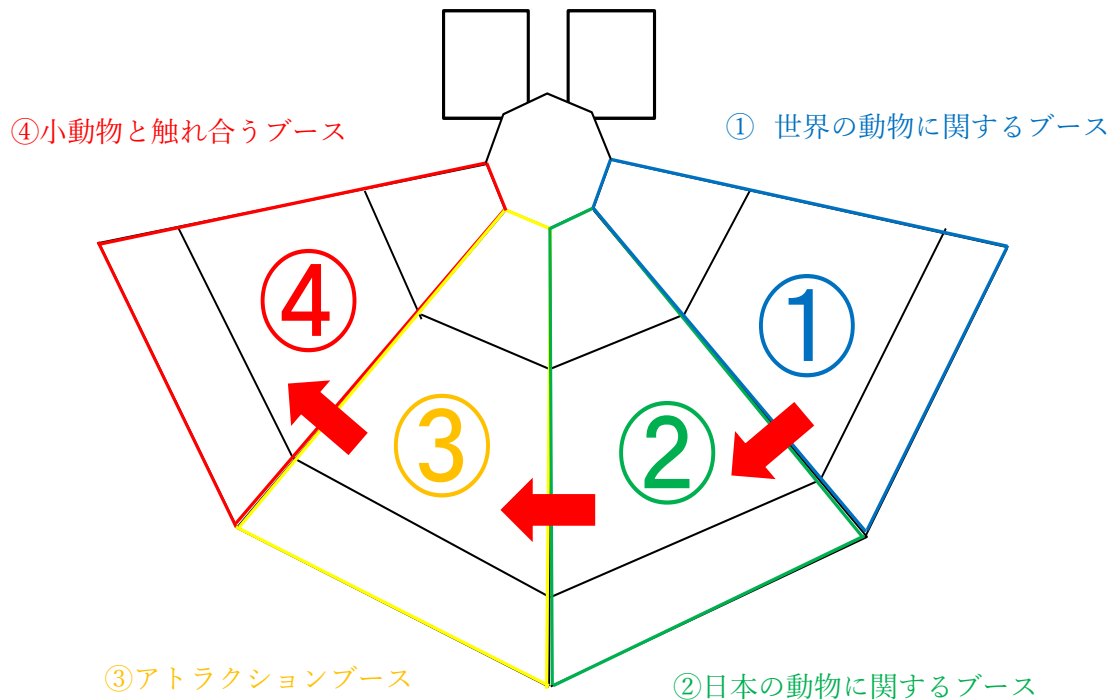
また問④のアンケートの回答の中では、動物園へ行かない人の理由に、「臭いから」、「他の場所へ行きたいから」、という項目があった。このような人たちを、まず headquarters(本部)へと誘導し、次に地方の動物園へと行きたくなるような仕掛けを作れば良いだろう。headquarters(本部)は動物の生態に関する学習施設や、身体を使って学べるアトラクションのようなもので構成され、動物園特有の臭気もないので、これまで動物園を敬遠していた人たちのとっても、行きやすい場所になると考える。

このような動物園ネットワークを構築することにより、全体の収益を一元的に取りまとめ、動物保護の研究活動費に充当することができるようになるため、単独経営の一般的な動物園よりも、研修費をより多く確保することができると予想される。それでも万が一研究費が不足する場合には、動物園のイベントやクラウドファンディング、あるいはネーミングライツなどを利用して運営資金を募るとよいだろう。

図⑦
ネットワークイメージ



図⑧headquarters(本部)イメージ図



(2) 今後の展望

これからの課題の一つとして、人々がこのネットワーク内の様々な動物園を訪れるためには、長距離の移動が必要になる場合があるという問題がある。どうすれば人々は居心地から遠い場所の動物園に足を運んでもらえるのか、そこが今後の研究課題である。

最後に、野生動物保護について探究活動をしていく中で強く感じたことは、「動物」をどうするか、よりも「動物の生きる環境」をどうするかについて考え、行動することが最も重要であるということである。動物にとって住みやすい環境とは、つまり私たち人間にとっても暮らしやすい環境なのではないだろうか。そのためには、私たち人間一人一人が、節水・節電・3R の実施といった豊かな地球環境を守る活動を、日々実施することの大切さを改めて考えさせられた。

5謝辞

アンケートにご協力いただいた皆様、園長の生江信孝様をはじめとしたかみね動物園の皆様、日立市の現地調査に協力していただいた皆様、そして、指導してくださった先生方、大変お世話になりました。ありがとうございました。

参考文献

- 資料① 川端裕太・本田公夫『動物園から未来を考える』亜紀書房
- 資料② 白輪剛史 2010 年『動物の値段と売買の謎』ロコモーションパブリッシング
- 資料③ ポール・A・リース 2016 年『動物園の作り方 入門動物園学』
農林統計出版
- 資料④ 高槻成紀『人間の偏見 動物の言い分ー動物の「イメージ」を科学するー』
イスト・ブレス社
- 資料⑤ 溝井裕一『動物園の文化史 ひとと動物の 5000 年』勉誠出版
インターネット
- 資料⑥ 環境省自然環境局 日本の動物分布表 動物多様性センター
2020 年 2 月 18 日
<https://www.biodic.go.jp/kiso/atlas/>
- 資料⑦ 日本野鳥の会 日本野鳥の会 web 2020 年 2 月 18 日
<https://www.wbsj.org/>
- 資料⑧ 大阪市 平成 30 年度定期監査等結果報告の公表について(天王寺動物園に関する事務)2020 年 3 月 17 日
<https://www.city.osaka.lg.jp/somu/cmsfiles/contents/0000468/468884/p185-206.pdf>
- 資料⑨ 公益財団法人愛媛県動物園協会 平成 28 年度事業報告及び決算報告書
2020 年 3 月 17 日
<https://www.tobezoo.com/kyokai/2018/10/11/H28kessan.pdf>
- 資料⑩ 佐渡友 陽一 動物園を支える仕組みの必要性 2020 年 3 月 17 日
https://www.city.sapporo.jp/zoo/01sougouannai/06doubutsuennotorikumi/02shimindoubutsuenkaigi/doubutsuenjourei/documents/shiryoul_sasaerushikumi.pdf